



## 第2章 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

古市, 晃 ; 木村, 修二 ; 河島, 真 ; 吉川, 圭太 ; 奥村, 弘 ; 井上, 舞 ; 前田, 結城 ; 市澤, 哲 ; 川内, 淳史 ; 河野, 未央 ; 大槻, 守 ; 佐々木, 和

---

### (Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 14(平成27年度事業報告書):33-47

### (Issue Date)

2016-03-22

### (Resource Type)

report part

### (Version)

Version of Record

### (URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81009350>



## 第2章

# 歴史文化を活かしたまちづくり支援と自治体史の編纂協力

### 播磨国風土記をめぐる兵庫県教育委員会文化財課との連携事業

風土記編纂の官命がだされて1300年経ったことを期して、2013年1月、兵庫県教育委員会文化財課により「播磨国風土記調査検討委員会」が設立された。これは、兵庫県教委のほか、県内の旧播磨国に属する市町の文化財担当職員、および大学関係者等で構成されている。風土記の基礎的研究とその普及・活用を目的としている。要請により古市晃が委員として参加している他、委員長として坂江渉氏（兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室）が委員長につき、高橋明裕氏（立命館大学）が委員として参加している。3ヶ年計画の最終年度にあたる今年度は、11月29、加西市健康福祉会館にて「風土記5ヶ国サミット 風土記の神話を考える」と題して、播磨のみならず風土記が残る他の4ヶ国の研究者も招いてシンポジウムをおこなった。関和彦氏による基調講演のほか坂江氏をはじめ5名が講演をおこない、古市と高橋氏が司会・コーディネーターを務めてパネルディスカッションもおこなわれた。当日は加西市子ども狂言塾による新作狂言「根日女」も上演され、多くの市民が参加した。

（文責・古市晃）

### 包括協定にもとづく灘区との連携事業

本年度は灘区と連携した活動はなされなかった。なお、2016年2月現在の『篠原の昔と今』（2005年度発行）、『水道筋周辺地域のむかし』（2006年度発行）の残部は共に約300部となっている。本年度も断続的な配布依頼があった。

（文責・木村修二）

### 神戸市との連携事業

#### 1. 神戸都市問題研究所・神戸市文書館との連携事業

公益財団法人神戸都市問題研究所・神戸市文書館との間で、2006年度から共同研究「歴史資料の公開に関する研究」を継続して行っている。主な内容は、①神戸市文書館に収集・所蔵される歴史史料の整理、調査、さらに公開、活用のための土台作り、②神戸市文書館の来館者に対するレファレンスサービス（特に古文書の解読）、③毎年秋に開催される企画展の企画と準備、の3つである。③については、本年度、11月9日（日）から21日（土）まで、企画展「『都市と戦争』—新資料に見る防空と戦災—」を開催した。

また、『新修神戸市史』生活文化編(仮題)の編集・刊行に向けての意見交換を行った。同書については年度内に執筆者と目次案が決定される予定である。

(文責・河島真)

## 2. 神戸市企画調整局との震災資料をめぐる連携

2015年1月より神戸市では、神戸都市問題研究所が整理作業を進めていた阪神・淡路大震災関連公文書の公開を開始した。この神戸市の震災関連公文書の整理等については、2009年度より神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが神戸市企画調整局企画課と共同研究を開始し、2010年度には神戸都市問題研究所分室での整理作業に研究員を派遣し、目録作成や整理保存方法などについて専門知識の提供を行なった。

本年度は、2016年1月8日から22日にかけて神戸市立地域人材支援センターで開催された「阪神・淡路大震災関連文書企画展」を奥村弘・佐々木和子・水本有香が見学した。また、1月22日に開催した第5回被災地図書館との情報交換会(於神戸大学附属図書館)において、都市問題研究所主任研究員の杉本和夫氏に阪神・淡路大震災関連公文書の整理・活用について報告してもらい、意見交換した。

(文責・吉川圭太)

## 3. 『神戸市文献史料』の編纂

1978年発行の第1巻以来、長年にわたって発行され続けてきた神戸市教育委員会発行の『神戸市文献史料』の編纂事業が、本年度より当センターに委託されることになった。協議の結果、現時点ではおよそ2年で冊子1冊の発行を目指すことになっている。同教委の要請により、テキストとして神戸市立中央図書館所蔵の「神戸村文書」の整理・翻刻を進めることになったが、年度の終盤に決定した事業だったため、本年度は主にテキストの撮影を進めることとなり、2月下旬より開始する予定である。

(文責・木村修二)

## 神戸市を中心とする文献資料所在確認調査

### 1. 神戸市を中心とする文献資料所在確認調査

本年度該事業に関わる主な活動は以下の通りである。

(1) 中央区：神戸北野美術館における展示協力  
昨年度よりはじまった神戸北野美術館での展示は現在も継続している。

(2) 灘区：新在家ふれあいまちづくり協議会への協力

1月24日、新在家地域福祉センターにおいて、「新在家ふれあいのまちづくり協議会」(委員長明石裕昌氏)主催による新在家ふれまち郷土歴史研究・歴史講演会が開催され、当センターが紹介した河野未央氏(尼崎市立地域研究史料館)が「江戸時代の新在家～海上交通・酒造業～」というタイトルで講演された。

(文責・木村修二)

### 2. 神戸大学附属図書館との連携

#### (1) 郷土文書の整理

昨年度に引き続き、人文学研究科院生で日本中世史専攻の山本康司氏に文書の整理作業に当たってもらった。今年度は、「摂津国兔原郡篠原村若林(嘉茂治)家文書」「近江国坂田郡東御堂前町沓水家文書」の整理を進めてきた。若林(嘉茂治)家文書は、全604点を数え、書状が多いが近世前期にまで遡るものを含む。沓水家文書は、全130点で、宝永年間から明治中期までの文書が含まれるが、幕末・明治初期のものが特に多い。成果物は、図書館によってデータベース化され、解題とともに近日同館HP上に公開される予定である。今年度終盤から、「河内国丹南郡伊賀村文書」に着手している。

2月12日に図書館関係者と当センター関係者

とで事業をめぐる協議を行い、今年度の活動報告および、次年度の活動方針を協議した。次年度も山本氏による整理作業を継続する。整理作業は終盤にさしかかりつつあり、今後はデジタルアーカイブを含め、古文書の公開へ向けた取り組みも視野に置いて進めていくことが確認された。

## (2) 展示会「村上家文書の世界」への協力

10月1日(木)から12月15日(火)まで社会科学系図書館2階展示ホールにおいて、「村上家文書の世界～近世×神戸×農村～」が開催された。展示準備はもっぱら図書館職員が行ったが、当センターは展示史料の選定などに関わることとなり、郷土文書の整理作業を行っている山本氏がこれに携わった。準備過程では、5月と6月に山本氏による図書館担当者向けのレクチャーがなされ、職員による展示物製作への参考に供した。

(文責・木村修二)

## 財団法人住吉学園との連携事業

住吉歴史資料館の運営に関して専門委員として関与する当センターの研究員が主に関わった同館での事業に限定して、以下報告する。

### (1) 『住吉歴史資料館だより』の発行

『住吉歴史資料館だより』は、5月27日に第10号が、12月15日に第11号が発行された。専門委員による執筆分についてのみ挙げると、第10号では、木村執筆の「『住吉村誌をよむ』ドビワリをめぐる争論」が、第11号には松下正和氏(近大姫路大学)による「東求女塚古墳と菟原処女伝承(4)」と木村の「『住吉村誌をよむ』住吉最古のたてもの?—野望堂」がそれぞれ掲載された。

### (2) 住吉歴史資料館展示関係

同館の常設展示について、全面的な展示替えを目標に作業を進めた。3月に暫定的な全面展示替えを行う予定である。

### (3) 阪神淡路大震災関係聞取調査

昨年度末の2015年3月29日、阪神淡路大震災経験者からの聞取を中心に構成された『阪神・淡路大震災資料集Ⅰ 住吉の記憶「住中と水」』が発行された(一般財団法人住吉学園・住吉歴史資料館発行)。ひきつづき同資料集Ⅱの発行へ向け協議が進められている。

(文責・木村修二)

## 大学協定にもとづく小野市との連携事業

小野市立好古館の特別展「江戸時代の産業経済の発達～小野市市場地区～」(2015年10月31日～12月20日)について、展示のための現地での聞き取り等に、学術研究員を派遣し協力を進めた。また開会式に、奥村弘地域連携センター副センター長が出席し、地域歴史遺産の活用事例として、特別展についてコメントした。またデジタル化した『東播磨時報』等について、目録集を作成した。

(文責・奥村弘)

## 連携協定にもとづく朝来市との連携事業

2005年3月に朝来郡生野町と締結された協定は、同年4月の市町村合併により、朝来市に引

き継がれた。以降、おもに市内の古文書の整理・保存・活用にかんする活動を行っている。本年度については、つぎの事業を行った。

#### (1) 民間所在史料の調査・保全

昨年度に続き、石川家文書の整理を行った。2014年に石川家の外蔵が破損したことをうけ、内部にあった資料の搬出を進めていたが、2015年9月に全ての資料の搬出を終えた。搬出した資料は、朝来市教育委員会の協力を得て、旧奥銀谷小学校に移管した。また2008年度より行っている、内蔵資料の整理については、2015年8月に地域住民を交えた古文書の整理会を開催した。

#### (2) 奥銀谷地域における「文化遺産を活かした地域活性化事業」・「但馬地域活性化推進事業」への支援

奥銀谷自治協議会では、2014年度に文化庁の支援（文化芸術振興費補助「文化財を活かした地域活性化事業」）を受け、山田家文書の整理を行ってきた。また、本年度あらたに「但馬地域活性化推進事業」の助成を受け、旧生野町域の古文書整理を行うことになった。地域連携センターではこれらを支援する形で、次のような事業を行った。

##### ①山田家文書整理会への支援

昨年に続き、奥銀谷自治協議会かながせの郷で行われている、山田家文書の整理活動を支援し、地域住民とともに月1回のペースで整理作業を行った。

この整理作業で得られた成果をもとに、「特別展：明治期の山田家と鉱山経営―生野銀山から樺坂鉱山へ―」（於かながせの郷、会期：2016年3月3日～21日、地域連携センター共催事業）を開催し、本年度整理した資料を中心とした展示を行った。

##### ②石川家文書整理会への支援

(1)で搬出した外蔵の資料を整理するため、2015年12月より石川家文書整理会がはじまった。現在、地域住民とともに、月2回のペースでクリーニング・付箋つけ・写真撮影作業を行っ

ている。

#### (3) 「生野銀山石川家文書の魅力を語る会」への参加

2015年3月、大学・地域住民・行政の有志で、石川家文書の研究会「生野銀山石川家文書の魅力を語る会」が結成された。この中で、井上舞が「石川家史料整理の現状と課題」（第2回、2015年8月）、「石川家外蔵文書の搬出作業について」（第3回、2015年12月）、「石川家外蔵文書の整理について」（第4回、2016年3月）（場所はいずれも生野メインホール）と題した報告を行った。

（文責・井上舞）

## 丹波市との連携事業

#### (1) 連続講座

昨年度に引き続き、6町巡回の歴史講座（以下、連続講座）を開催した。今回は全体テーマを「講座 丹波の歴史文化を知る・つなぐ」と改名したうえ、以下の日程でおこなった。

第1回 6月20日（土）／於氷上住民センター  
／来場者54名

前田結城「旗本佐野領の幕末維新Ⅰ」

第2回 7月18日（土）／於春日住民センター  
／来場者70名

芦田岩男「丹波の戦国時代」

第3回 9月26日（土）／於ライフピアいちじま  
／来場者35名

前田・加藤明恵・小野塚航一「史料のなかの水害・水害のなかの史料」

※前半は幕末氷上郡の水害についての講演、後半は水損資料修復のワークショップ

第4回 10月17日（土）／於柏原住民センター  
／来場者約30名



加藤明恵「柏原藩政日記を読むⅡ」

第5回 11月21日(土)／於青垣住民センター  
／来場者40名

山上憲太郎「古代氷上郡の木簡を読む」

第6回 12月12日(土)／於山南住民センター  
／来場者約30名

井上 舞「山南町域の寺社縁起」

本年度は、平均的にみて来場者の増加がみられた。また、アンケートの結果はおおむね好意的なものであり、事業の充実・継続を望む意見が大半であった。

構成上の特徴としては、講義形式を軸としながらも、史料現物の見学会(第2回)やワークショップ形式(第3・4・5回)を積極的に取り入れた。話を聴くのはよいが、実体験するのは難しいという意見も中にはあるが、本連携事業が地域歴史文化の担い手づくりを目的とする以上、今後も「アクティブ・ラーニング」の試みを続けていきたいと考えている。

## (2) 丹波市内古文書調査

本年度は下記の通り市内文書調査を実施した。

- ① 2015年7月25日(土) 氷上町・氷上区有文書調査
- ② 8月15-16日(土-日) 柏原歴史民俗資料館所蔵上山家文書調査
- ③ 10月16日(金) 春日町棚原公民館所蔵波多家文書調査
- ④ 11月8-9日(土-日) 氷上区有文書調査
- ⑤ 11月20日(金) 波多家文書調査
- ⑥ 11月28日(土) 氷上区有文書調査
- ⑦ 2016年2月13-14日(土-日) 氷上区有文書調査

本年度の調査は、氷上区有文書と波多家文書につき、新規の調査となった。とりわけ、氷上区有文書調査については、本年度は「第Ⅰ期調査」と位置づけ、数百点に及ぶ史料を研究員・学生・住

民共同で整理した。本文書は上記⑦の調査で仮目録作成を完了させており、現在これらの電子データ化を進行中である。調査のたびに区有文書の勉強会も抱き合わせでおこなっており、住民の史料に対する興味・関心は徐々に増しているともてよい。⑥の調査時には神戸新聞、丹波新聞二紙からの取材を受けた。また、⑦の調査時は約20名の住民にご参加いただき、その半数近くが女性であったことも本地区調査の特徴といえよう。来年度は第Ⅰ期調査の成果に基づく現地フィールドワーク・史料展示会・記念講演会を抱き合わせで開催する予定である。

波多家文書については、現在棚原自治会の方々と共同で日清戦争下の旧国領村教員の日誌を解読中である。日清戦争をめぐる農村社会状況と農村青年の戦争認識についてつぶさに知ることができる好史料である。これについても、来年度講座のなかで研究成果の還元につとめたい。

## (3) 研究成果物の発表

### ①「丹波市オンデマンド史料叢書」の刊行

本年度は柏原歴史民俗資料館蔵上山家文書から、幕末維新期の史料数点を丹波市教委HP上にて公開する予定である(2016年3月中旬に公開予定)。

### ②広報たんばへのコラム寄稿

昨年度に引き続き、市広報誌『広報たんば』に毎月古文書調査・研究結果を市民向けのコラムとして発表した。

(文責・前田結城)

## (4) 丹波古文書倶楽部への協力

本年度も毎月第2土曜日に丹波市内の住民センターを会場に例会が開催され、木村がチューターを務めた。また、12月12日の例会の後には、同市内においてフィールドワークが開催され、木村がアドバイザーとして参加した。

(文責・木村修二)

## 連携協定にもとづく加西市との共同事業

加西市と神戸大学との連携協定は、2009年5月16日に締結された。これにもとづき、本年度は次のような事業を行った。

### (1) 青野原俘虜収容所関連資料の調査研究

第一次世界大戦中に加西市に設置された青野原俘虜収容所については、これまで小野市好古館との事業のなかで、写真資料の調査が行われてきた。しかし、2012年度からは、加西市市立図書館郷土資料係との共同調査が行われるようになった(2015年度からは、加西市側の担当が、市教育委員会生涯学習課市史文化財係に移行)。2014年度には、第一次世界大戦開戦100年を迎えたことにより、これまでの成果を公表するための、様々な企画が開催された。

2015年に青野原俘虜収容所が開設100年を迎えたことから、本年度については、大津留厚(神戸大学人文学研究科教授)が中心となり、俘虜や収容所、また周辺地域の人々との異文化交流の諸相を明らかにするための調査研究を行った。また、一連の成果や収容所の存在を周知するため、次のような企画を開催した。

① 2015年8月～12月(於JR青野ヶ原駅コミュニティールーム)「大門口駅と青野原俘虜収容所」(加西市教育委員会・小野市立好古館・神戸大学共催行事)

俘虜が降り立った播州鉄道大門口駅の後身であるJR青野ヶ原駅において、俘虜収容所を紹介するパネルを展示し、これまでの研究成果を公表した。

② 2015年11月3日(於アクアスカさい)「青野原俘虜蹴球交流戦再現エキシビジョン」(加西市教育委員会・小野市好古館・神戸大学共催事業)

青野原の俘虜と、姫路師範学校(後の神戸大学)、

旧制小野中学校(後の市立小野高校)との間で行われたサッカーの交流戦を再現するイベントが開催された。交流戦では〈姫路師範学校チーム〉として、神戸大学の学生が参加した。

③ 2015年12月12日(於青野原周辺域)「青野原俘虜収容所開設100周年記念ウォーキング」(加西市教育委員会・小野市好古館・神戸大学共催事業)

俘虜が収監のため、播州鉄道大門口駅から収容所に向かった道をたどるウォーキング大会が開催された。同大会には石井大輔(神戸大学大学院人文学研究科研究員)が参加し、途中休憩所となった青野原公民館で俘虜収容所にかんするレクチャーを行った。

④ 2016年3月5日(於アスティア加西)「シンポジウム 加西に俘虜がいた頃—青野原収容所と世界—」(加西市教育委員会・小野市好古館・神戸大学共催事業)

⑤ これまでの研究成果についてまとめた冊子『加西に俘虜がいた頃—青野原収容所と世界—』(編集担当:石井大輔)が、3月末に発行予定である。

### 青野原俘虜収容所開設100周年事業 記念シンポジウム

#### 加西に捕虜がいた頃 —青野原収容所と世界—

日時 平成28年3月5日(土) 13時～16時(12時開場)  
場所 アスティアかさい3階 多目的ホール  
募集 90名(当日先着) 予約不要  
参加費 無料



講師  
大津留厚(神戸大学 大学院人文学研究科教授)  
ベルタラニチュ・ボンティアン(城西大学現代政策学部准教授)  
尾瀬耕司(神戸建築文化財研究所)  
萩原康仁(加西市教育委員会)

主催 加西市教育委員会 小野市立好古館 神戸大学

問合せ先 加西市教育委員会 埋蔵文化財整理室

TEL : 0790-42-4401 shishi@city.kasai.lg.jp

## (2) 播磨国風土記シンポジウムへの参加

兵庫県の播磨国風土記調査検討委員会の調査活動の一環として、2015年11月29日に、シンポジウム「風土記5ヶ国サミットー風土記の神話を考える」(於加西市健康福祉会館)が開催され、古市晃(神戸大学人文学研究科准教授)が司会コーディネーターを務めた。

(文責・井上舞)

## 尼崎市における連携事業

引き続き、市制100周年記念事業の一環である新市史の編纂に協力した。編纂の企画には、尼崎市立地域研究史料館の専門委員を務める市澤哲が協力し、執筆には村井良介、古市晃、市澤哲らが携わった。新市史は、2016年10月の発刊の予定である。また、尼崎市立文化財収蔵庫が主催した展覧会『尼崎の南北朝』の学術講演の講師を市澤が務めた(10月31日)また、2016年1月24日に開催された「尼崎市制100周年記念歴史遺産保存活用シンポジウム」の企画に協力し、当日は市澤がコーディネーターを務めた。

(文責・市澤哲)

## 三木市での連携事業

### (1) 三木市史編さん支援事業

2014年度より、新三木市史編さんに向けての指針作成および具体的支援を進めてきた。なお、本年度より三木市側の事業主管部署が企画管理部総務課より市教育委員会教育企画部文化スポーツ

振興課へと移管され、市教委との連携事業となった。市側の主管部署の変更および大学側の担当者変更に伴い、今年度は5月より文化スポーツ振興課市史編さんグループに特命教員を派遣した。本年度は市史編さん事業の本格的な開始に向けて、自治体教委と大学と連携で自治体史編さん事業を進める大阪府和泉市(2015年7月)および、市民ボランティアを活用しつつ地域資料の整理事業を先進的に行っている新潟県十日町市・長岡市(2016年3月)への視察を行い、事業構築に向けての体制作りを行った。

市史編さんに向けての啓発事業として、9月26日には市史編さんシンポジウム「新三木市史に期待する」(主催:三木市・三木市教育委員会・神戸大学、於:三木市中央公民館)を開催し、奥村弘による市史編さん事業に関する趣旨説明、坂江渉氏(兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室研究コーディネーター)・板垣貴志氏(島根大学法文学部准教授)による講演、および坂江・板垣両氏および市民代表として進藤輝司氏(三木古文書研究会)、木梨美知子氏(ガイドボランティアみき)をパネラーとするパネルディスカッション「新三木市史に期待する」を開催した。当日は市民を中心に約150名の参加を得て、市史編さんに向けての市民的な機運の高まりが確認できた。

また、昨年度に引き続き冬期古文書合宿(2月23日~24日)を三木市で実施した。本事業は市教委内においても市史編さん事業の一環として位置づけられ、旧玉置家住宅での歴史文化を活かしたまちづくり活動が学生教育の教材になるとともに、合宿の成果が今後の市史編さん事業へと活用されることが期待される。またその他、今年度からは、市民からの情報提供を得る形で、市内地域資料の現状確認・整理作業に着手した。本年度の成果については、来年度以降展開する予定の本格的な地域資料の悉皆調査へと繋げていきたい。

### (2) 商工観光課との連携事業

2010年度より、文化庁の地域伝統文化総合活性化事業(「三木市文化遺産総合活用活性化事業」)



が開始され、今年度も三木市観光振興課の担当者および三木市観光協会の職員と協議を重ね、事業を展開した。旧玉置家住宅を活動拠点に、玉置家に保存されていた文書群（古文書・書籍）の整理を進めている市民グループの活動を支援した。

本年度は、従来大学よりの講師派遣を行っていた古文書講座については「三木古文書塾」として市民主体の事業にリニューアルされ、市民主体の歴史文化を活かしたまちづくり事業がより進展した。また本年度は、これまでの旧玉置家住宅を拠点とする取り組みについて、1月24日に開催された公開シンポジウム「地域と共に考える文化財の防災減災Ⅱ」（主催：九州国立博物館）において報告され（報告者：辻田政顕氏・三木市豊かなくらし部商工観光課、パネリスト：川内淳史）、三木市における取り組みが全国的に発信された。

また、本年度は『玉置家文書目録』下巻を刊行した。

（文責・川内淳史）

## 三田市との連携事業

本年度も、旧三田藩主九鬼家資料の総合調査を実施した。昨年度は近世・近代の九鬼家政ないし幕末維新时期政治情報関係の史料につき目録・史料解説を制作したが、本年度は、慶長期の鳥羽藩九鬼家の藩政に関する藩主直筆書簡につき、目録を目下制作中である。これらの書簡は2本の巻物にまとめられている。本年度は文化財指定も視野に入れた精細な写真撮影（堀内カラー協力）を完了させており、目録とあわせて、デジタルアーカイブ化して市民の利用に供したいと考えている。

（文責・前田結城）

## 篠山市との連携事業

本年度の取り組みは3つに大別できる。

### (1) 篠山市西町・樋口達兵衛家文書調査

これは、90歳近い樋口達兵衛氏が、このたび自宅を古民家再生業者に移管されるのに伴い実施されたものである。調査の結果、近世福住宿関係の史料などを含んでいることが判明した。現在は神戸大学篠山フィールドステーションに段ボール3箱を仮置きしているが、将来的には福住で現地保管していただけるよう、調整を進めていきたいと考えている。

### (2) 篠山市立中央図書館資料整理サポーターの活動支援

本活動は、2013年から継続しておこなわれている。活動の詳細については本報告書掲載の、同図書館職員井上勝盛氏の原稿をお読みいただきたい。特筆すべきことは、2015年7月12日（日）、市内在住の郷土史家・中野卓郎氏（87）より県立鳳鳴高校所蔵文書や市立歴史美術館所蔵文書の来歴、また旧家文書の残存状況などについて、ご自身の経験を踏まえながら詳細なお話を伺えたことである。なお、この「聞き取り調査」については、神戸新聞よりも取材を受けた（同紙丹波版、2015年7月14日付に掲載）。

### (3) 「古文書合宿」の実施

文学部「地域歴史遺産保全活用演習」および文学研究科「地域歴史遺産保全〔企画〕演習」等の授業を、農学部篠山フィールドステーションにおいて、8月23～25（日～火）の2泊3日で実施した。本合宿では継続調査中の「中西啓勝家文書」や前掲「樋口達兵衛家文書」を主な教材として、学生と地域資料整理サポーター（前述）とが共同で、目録作成の実習をおこなった。最終日に

は成果報告会を開催し、同サポーターと福住地区住民を招待のうえ、学生より資料の内容について発表と討論をした。来聴された住民からは、大変好意的な評価が寄せられた。

なお、(1)～(3)の活動内容については、2016年1月23日(土)開催の「第10回篠山市・神戸大学地域連携フォーラム」(於丹南健康福祉センター)において、前田より報告をおこなった。  
(文責・前田結城)

## 明石市との連携事業

明石市との連携事業は、厳密には2つの異なる業務からなる。一つは、2008年度より継続している「明石藩関連資料調査・公開業務委託」、もう一つは、本年度よりスタートした新・明石市史編纂事業にかかわる一連の業務である。

### 1. 「明石藩関連資料調査・公開業務委託」(平成27年度)

#### (1) 資料調査

##### ①黒田家文書(明石市受蔵分)

旧明石藩士・黒田家文書における黒田長保「日記」の翻刻作業を本業務の中で進めている(担当前田結城)。今年度は、「仮日記」(明治2年)(4-4)の解説を完了した。

なお、12月28日に発行された『LINK』第7号誌上に、前田の編著によって慶応三年日記の史料紹介が掲載された。

##### ②黒田家文書(神大購入分)

目録作成は未了。昨年度報告書で触れていないものとしては、黒田長棟の収入に関わると思われる史料が見いだされたのが注目される。これは、次年度の展示会に出品する可能性も含めて今後さらなる調査を進める方針である。

##### ③松平家旧蔵文書

昨年度静岡県在住の松平家より見いだされた文書群(松平家文書Ⅱ)は今年度正式に明石市が受贈した。それに先立ち、すでに寄贈されている分(松平家文書Ⅰ)とともにExcelデータによる目録を当センターが作成した。

#### (2) 調査研究成果

##### ・「明石藩の世界Ⅲ」展への参画

2015年12月23日(水・祝)から2016年1月31日(日)まで、明石市立文化博物館において、「明石藩の世界Ⅲ」と題する展示会が開催された。本展は、2013年度より開催されている「明石藩の世界」展の第3回という位置づけであり、サブタイトルを「藩主と藩士」とした。

昨年度同様、明石市と明石文化博物館と神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターが主催となったが、大学は主に展示の立案・構成を担当した。

今回の展示では、本年度正式受贈となった松平家文書Ⅱから口宣案を中心に展示し、明石藩主松平家の家格や官位などの経歴を主なテーマとして展示し、明石市と神戸大学がそれぞれ所蔵している黒田家文書や明石文博蔵美濃部家文書のほか個別にお借りした文書群(速水家文書、雨夜家関係文書)を素材に藩士の履歴をめぐる展示をおこなった。また、昨年度展示した黒田家の年中行事史料から正月料理に関する部分を再展示するとともにおせち料理の再現を人丸花壇に協力要請し、調理していただいたもののパネルをレシピとともに展示した。あと、幕末維新期の明石藩士の動向に関するコーナー、近世中期の明石藩士で儒者・書家・漢詩文作者だった梁田蛻巖の作品も展示した。

本年度の展示会でも、展示図録が製作され、その本文執筆も一部を除いて神戸大学側が行なった。解説論文のタイトルは、以下の通りである(掲載順)。

木村修二「明石藩における藩主と藩士の履歴」

前田結城「明治維新のなかの明石藩主と藩士」

その他、図録では図版解説、史料翻刻なども当

センターが執筆担当した。

展示会期間中は、センター研究員（木村）によるギャラリートークを定期的実施した（12/26、1/8、1/15、1/22、1/29）。展示会観覧者（入館者）は期間中 2416 名（博物館調べ）であった。

1月17日には、記念講演会が開催され、木村が講演を担当した（「明石藩主と藩士の履歴をめぐって」）。参加者数 82 名。講演会終了後には、講演参加者の有志を対象に展示会場でのギャラリートークも実施し、木村、前田がそれぞれの担当コーナーにおいて解説をおこなった。

また、本展との連携イベントとして、1月23日に同館において「シンポジウム『明石藩士は何を食べていたか』」が開催され、パネラーとして木村が参加し、「藩士・黒田長棟が食べたもの」と題した報告をおこなった。

## 2. 明石市史関連

### （1）新・明石市史の編纂体制と協議

新・明石市史に関しては、今年度各部会単位での調査を中心に進められたが、編纂計画などについて未定の部分が多く、そのことが調査の展開に影響したことも否めない。とりわけ市史編纂室の位置づけが曖昧な状態であることが大きく、早急な編纂計画と予算措置の決定が望まれる。そんななか、編さん委員会および編さん専門部会での議論の大勢としては、比較的原稿化が早いと見込まれる自然・考古編の 2019 年度までの発刊を目指し、各部会の成果や市史編纂事業の発信のため研究紀要の発行をなんとか目指すというものである。市当局との認識のギャップはあるものの、次年度には上記の方向で編纂事業全体が進んでいくものと思われる。

各部会長が集まって調査の進展具合や予定などを確認・協議する編さん専門部会は、年に 3 回開催されることになっているが、今年度は、明石市長選の影響もありやや遅い 7 月 25 日に第 1 回目、11 月 21 日に第 2 回目が開催された。なお第 3 回目は 3 月 5 日に開催予定である。

### （2）「明石市における地域史料の調査研究業務委託」（平成 27 年度）

昨年度いらい、明石市における地域史料の調査を行おうとするとき、史料所蔵者や所蔵可能性のある家や団体の情報など調査の前提となるデータが揃っていないのが現状だった。それでも旧『明石市史』や『明石市史資料』などの既刊書からのわずかな情報から、いくつかの家を特定し、アプローチをかけた結果、昨年度末に福里地区の大西家と大久保地区の安藤家への所在確認調査が実現した。この両家に対し、今年度初めの 4 月 4 日に、明石市史近世部会（部会長 大國正美氏）や地域部会のメンバーおよび市史編さん室が訪問して、文献史料の保管状態についての現状記録をおこなった。この調査には、木村とともに現状記録調査の経験がある松下正和氏（近大姫路大学）の協力を得て、調査を進めた。調査の結果、土蔵などに点在する文献史料を記録し、今後の調査に資するデータを得た。この後は、本格的な調査に移行することになるのが決定しておらず、編さん委員会や編さん専門部会での決定を経る必要があった。近世部会が調査を進める動きもあったが、他部会が関係する史料が見いだされる蓋然性も高いことから、市教委と編さん委員会のコアメンバーの協議の結果、文献調査の中核にはやはり編さん室が位置しているべきことが確認され、神戸大学が委託をうけた本事業を主担する木村がアドバイザー的に関わることで調査を進める方向で内定した。この点は、7 月に行われた専門部会でも確認された。

とはいえ、前述のように編さん室のスタッフの身分的な位置づけは曖昧なのが現状であり、すでに任務としている作業などとの兼ね合いもあり、ただちに市内の全ての調査を編さん室が核になって進めることはほとんど不可能であるうえ、木村と編さん室の関係も十分に確立していなかった。

そんな状況のなか、近世部会の強い意志により 8 月 22 日に福里・大西家の調査が実施された。調査の詳細については本報告書では省略する



が、未整理史料を多人数で撮影するという近世部会の方針を鑑みて、現状記録に基づき取り出された史料単位ごとに、清掃をしながら史料全点にあらかじめナンバリングした付箋を挿入する作業を行うこととなった。この作業は、9月26日、12月20日（近代部会と合同）、2月6日にも行われ、4月2日にも実施される予定である。なお、2月6日の調査では、撮影も開始されている。

ただ以上の調査では、みられるように近世部会のイニシアティブが強く、編さん委員会の総意として決定した調査の中核に編さん室が位置づけられているべきという状況からはいまだほど遠い状況だった。そこで本年度後半は木村と明石市史編さん室のメンバーとの円滑な関係の構築と、意識面も含め調査における編さん室のイニシアティブを確立し、そのうえで具体的な調査成果を生み出すことを目標に活動した。まず、市史編さん室との関係については、市史編纂事業全体における編さん室の位置づけが曖昧ななかにあっても、地域史料調査をどう進めるかを考慮した結果、月に1回定期的にミーティングを行う（毎月第1金曜）ことを提案し、室側の了承を得た（9月より定期開催）。これにより、調査方針や現状確認などの共通認識を持つことが可能になり、その後行われた大西家調査などでも準備面での効率があがった。とはいえ、文書群の確認がなされても、具体的な調査に着手するための体制（文書整理アルバイトなど）や予算的な措置（バイトの雇用や調査用具の充実）がほとんどなされていないことは、調査先への今後の調査方針の説明を行ううえでも大きな障害となった。市史刊行計画の早期の確立が待たれる。

このほか、12月4日に大久保・安藤家での文書の箱入れ替え作業を行い、東二見・大西家文書（8月7日）、西島農会文書（11月18日）、神戸市垂水区下畑・森本喜久家文書（11月29日）の所在確認調査、清水・平崎家文書の撮影着手などの調査・作業をおこなった。

### （3）地域部会との関係

木村が委員として位置づけられている地域部会の主要メンバーは、文化庁の助成（文化遺産を活かした地域活性化事業助成）をうけ、「明石民俗文化財調査団」を組織して、昨年度は農村を調査を進め、冊子の発行したが、今年度は対象を漁村におき、調査が進められた。年度終了までに冊子が発行される予定である。木村は、オブザーバーとして協議に参加した。なお、次年度は宿場町を中心とする町場の調査が予定されている。

（文責・木村修二）

## たつの市との連携事業

### 1. 神戸大学近世地域史研究会

神戸大学近世地域史研究会は、昨年度に引き続き原則月1回日曜日に開催、構成メンバーは、阪神間を中心とした市民の方々だが、近年は姫路市など播磨地域からの参加も増えており、常時20名弱のメンバーで実施している。主な活動は、古文書翻刻作業のための読み合わせである。

2015年度は、これまでテキストとしていた、たつの城下町人の風聞記である「観聞記」を読み終えたため、目下『「観聞記」の世界（三）—播磨国からみる江戸時代—』の編集作業を実施している。それと並行して、現在は姫路市立城郭研究室所蔵「播州国中並隣国見聞之覚書」をテキストとしてその読み合わせを実施している。本年度はさらに、神戸大学附属図書館資料展「村上家文書の世界～近世×神戸×農村～」の展示見学のほか、参加者からの希望により、ほぼ隔月のペースでメンバーの研究報告会が行われた。たんに古文書を「読む」だけでなく「調べる」活動がメンバーによって自主的に取り組まれるようになってきた。学生への参加の呼びかけは引き続き課題として残っている。

（文責・河野未央）



## 2. 『播磨新宮町史』

たつの市立図書館の新宮分館が開催した、「『播磨新宮町史』を読む」連続講座で、市澤哲が12月6日の中世分野の講師を務めた。

(文責・市澤哲)

### 淡路市への協力

2015年3月27日、淡路市教育委員会に協力し、淡路市のH家資料の概要調査を実施した。今年度は引き続き、5月14日に同家資料の再調査・保全作業を実施した。この資料群の整理及び今後の活用については淡路市教育委員会と協議を重ねていく予定である。

(文責・吉川圭太)

### 姫路市香寺町での連携事業

香寺町が姫路市に合併した2006年以後は、地域連携センターが犬飼自治会との契約で犬飼公民館別館を借り受け、香寺町史研究室が入居して地域連携センターのサテライト的機能を果たしながら、香寺歴史研究会と連携して活動している。

#### (1) 香寺町史を読む会

第6次となるこの会を、例年通り前田結城と大槻守が交代でかつ隔月開催というスケジュールで進めた。今年度は史料を読み解きながら、前田は「近現代日本の戦争と香寺」を、大槻は「近世の村の生活」をテーマとして講読した。参加者は毎回十数人であり、終了後には自由な質疑応答が飛び交い、活発な会であった。

#### (2) 研究発表会

2月19日(木)、香寺公民館多目的ホールで開催された。主催は香寺歴史研究会、共催は当センターである。

“地域の歴史を調べる楽しさ”をテーマに会員の研究に加えて小学生の地域研究の発表もあった。歴史研究会では地域の歴史を調べる楽しさを歴史マップをつくることから味わおうとは取り組んでおり、その一例が溝口の発表であった。小学校の実践発表も4～6年生が住んでいる地域を歩いて、調べたことを地図上に表した楽しい内容だった。当日のプログラムは次の通りである。

講演：羽田真也氏(関西学院大学図書館)「地域史研究と地域づくり」

研究発表：鎌谷博善氏(溝口)「溝口の歴史マップをつくる」、藤田博善氏(田野)「『大字誌 高野の風』を発刊して」

教育実践：藤東瑞己教諭(香呂小学校)「郷土を調べる」

#### (3) 大字誌と資料展への協力

編さん途上の中屋と田野両地区からは意見を求められ、昨年度刊行の土師地区は資料展を開催し協力した。

田野の大字誌は、『香寺町史 村の記憶』編さん時の原稿を中心に、関係文献を収集し、地区の先人からのいい伝えなどを加えて編さんしている。播磨国風土記ゆかりの高野神社や法花堂2号墳、寛延全藩一揆の庄屋清瀬家が所在するなど、これら歴史的事項に重点が置かれている。生活の変遷では、蕨とかますの生産や秋祭りのにわか芝居の記述は詳細で興味深い。全7章で構成し、1. ふるさとの由来、2. 遺跡と古墳、3. 社寺と信仰、4. 史跡と争乱、5. 生活の移り変わり、6. 水利と農業、7. 民俗行事と伝説、である。資料に石造物、村明細帳、字限図を復刻している。体裁はA4判縦組で、カラー口絵20ページを含め約200ページである。

土師の資料展は一昨年3月の岩部、昨年8月の行重に続くもので、8月15・16両日に土師公

民館で開かれた。大字誌『ふるさと土師』の刊行を記念し、その編さん資料となった古文書・写真・新聞記事・神社木札などを展示した。また、姫路市埋蔵文化財センターの協力で地区内出土の遺物が展示され、解説も聞くことが出来た。来場者は150余人で香寺町域外からもあり好評であったという。

#### (4) 町史史料の保存と活用をめぐる問題

古文書入門講座は現在受講生7人で町史史料を教材に学習を進めている。また、行重では勉強会で村明細帳などの史料を読む講座が4回開かれ、協力した。

町史史料の保管場所に初めて入室確認したが、引越し時のダンボール箱をそのまま積み上げた状態であった。今後の保存問題は協議以前であり、依然として解決しないままである。奥村弘・神戸大学大学院人文学研究科教授と新任の市生涯学習部長を訪問したが何等進展はみられなかった。地元連合自治会など諸団体とも保存問題で協議を続けている。

(文責・大槻守)

## 佐用町との連携事業

市域の利神城を国指定史跡にする準備委員会に市澤哲、村井良介が委員として参加した。8月8日、9月26日、2月7日に報告書作成の会議を行い、12月20日には、現地踏査を行った。本事業は次年度以降も継続して行われる予定である。

(文責・市澤哲)

## 福崎町との連携事業

福崎町とは、2009年度より共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし及び大庄屋三木家住宅活用案の作成等」を開始した。本年度については、以下の事業を行った。

#### (1) 松岡家関連の資料調査・研究

昨年度に続き、松岡家関連の資料調査・研究を行った。本年度行った調査・研究は次の通りである。

##### ①松岡家関連資料の調査

松岡家関連の資料についての分析を行ったほか、資料中にあった絵葉書資料について、デジタルデータ化、目録作成を行った。一連の調査成果については、「松岡家展—柳田國男を導いた兄—」(於柳田國男・松岡家記念館、会期：2015年7月25日～11月23日、地域連携センター協力事業)において成果を公表した。

##### ②井上通泰関連資料の調査

2016年1月21日・22日に岡山大学附属図書館鹿田分館および岡山県立図書館・岡山市立中央図書館に所蔵されている、井上通泰関連資料の調査、写真撮影を行った。

#### (2) 三木家文書の研究

大庄屋三木家文書について、山崎善弘氏(奈良教育大学)の協力を得て、調査・分析を行った。今年度はこれまでの研究成果をもとに、三木家の新田開発を紹介するための展示素材の作成を行った。

#### (3) 辻川界限ジオラマワークショップへの参加

福崎町と工学研究科、人文学研究科の共同研究で、福崎町辻川界限のジオラマ制作およびワークショップを行った。ジオラマ制作は、これまで東

北地方で「失われた街」模型復元プロジェクト」に取り組んできた工学研究科槻橋研究室が担当した。

これを用いて、2015年8月8日～12日にかけて、辻川公民館においてワークショップが実施された（地域連携センター協力事業）。ワークショップには、5日間で80名弱の方が来場され、辻川界限にかんする様々な情報を得ることができた。ここで得られた情報をもとに、工学研究科側でジオラマの微修正を行う一方、人文学研究科では聞き取りをとりまとめた『つぶやき冊子』を作成した。完成したジオラマは、11月8日に開催された、福崎町文化財シンポジウムで披露された。



#### (4) その他

(1)～(3)の各事業について、『福崎町連携事業平成27年度活動報告書』に掲載した。また調査成果については、福崎町の広報紙『広報ふくさき』誌上で随時成果報告を行った。

(文責・井上舞)

### 猪名川町における連携活動

1. 猪名川町における多田院御家人関係文書調査  
昨年度から兵庫県歴史文化遺産活用活性化実行委員会を中心に、兵庫県立歴史博物館、関西大学

文学部古文書室、猪名川町教育委員会、および当センターが加わって、猪名川町域に所在する旧多田院御家人の系譜をひく家々の所蔵文書調査が文化庁の支援を受けはじまった。

本年度も昨年同様の体制で、同町上阿古谷地区在住の仁部家所蔵の文書を主な対象とし、とくに戦国期の塩川氏を中心とする多田御家人の動向を綴った軍記物語である「多田雪霜談」を中心に調査・分析を行うこととなった。

5月17日に、兵庫県立歴史博物館・藪田貫館長らとともに初めて仁部家を訪問し、『猪名川町史』編纂時にも提供された文書を含む文書群の所在確認と目録作成および一部撮影作業をおこなった。関係者の協議により、今年度の目標は、「多田雪霜談」の翻刻とその内容の分析に置かれることとなったが、当面は原本で全10巻からなる同書を1人2巻ずつ担当して翻刻（読点を施す解読筆写）を行うこととなった。

2回目の調査は8月22日・23日に実施されたが、22日は仁部家での未撮影分史料の撮影などをおこなった（木村不参加）が、23日は同様に多田御家人関係史料を所蔵しておられる島地区の平尾家での調査に充てられた。後者については、この度の調査では、まず町史時代の調査史料の所在確認を中心に行われ、中世文書と一部の近世文書についてのみ撮影が行われた。同家の調査は、次年度以降にさらに進められる予定である。

本年度は諸事情により現地への本格調査は、上記にとどまり、以降は成果のとりまとめにむけた協議が進められ、12月27日関西大学において、2月から開催予定の小展示会と報告書作成を中心議題として協議がなされた（木村不参加）。協議の結果、展示は「多田雪霜談」についていくつかのテーマを設定して翻刻・解説をパネルにまとめることとなったが、門外不出という所蔵者の方針により、「多田雪霜談」の原本展示は断念し複製を展示するに止めた。一方、報告書については、通常の報告書に加え、「多田雪霜談」の原本写真と翻刻および注釈と索引を加えた史料集も発行する方針が決定された。

展示会は、2月2日(火)から28日(日)まで、猪名川町生涯学習センターコミュニケーション広場を会場として開催された(展示パンフレットも作成)。なお開催期間中、2月6日と20日に展示製作を担当者によるギャラリートークが開催された。

なお次年度も同様に多田御家人関係資料の調査を継続する方針である。

## 2. 古文書講座

昨年度同様、公民館主催歴史講座として全10回の予定で古文書講座が開催され、木村が講師に招かれた。5月から3月まで月1回(第3土曜、8月は休会)のペースで開催され、およそ20名の参加が得られた。

## 3. 猪名川町文化財審議委員会と古文書調査

平成27年4月1日付で、木村が猪名川町文化財審議委員会委員を委嘱された。原則として個人活動ではあるが、本センターの事業との関わりも深いため、本報告書でも触れておく。本年度の第1回目の委員会は5月20日に猪名川町役場第2庁舎委員会室で開催され(以下会場同じ)、本年度の文化財事業計画などが審議された。とくに本年度は、同町が整備に力を入れてきた多田銀銅山遺跡の国史跡への指定を見越した取り組みが計画される方針が町から報告された。第2回目は、12月2日に開催された。多田銀銅山が10月27日付官報告示により国史跡指定が決定したこと、11月15日には指定記念シンポジウムが開催されたこと、兵庫県立考古博物館との共催で、多田銀銅山悠久の館および生涯学習センター コミュニケーション広場を会場として企画展を開催したことが報告された(悠久の館の展示は3月27日まで)。第3回目は3月23日に予定されている。

(文責・木村修二)

## 協定に基づく西脇市との連携事業

本学工学研究科の建築関係の教員と西脇市立小学校の昭和期木造校舎の修復保存及び、それと関係した地域史調査に関して、本年度事業枠組みについて議論を重ね、歴史文化領域の事業として、7月31日、神戸大学大学院人文学研究科と西脇市の間で連携協定を締結した(巻末参考資料参照)。これにもとづき具体的事業準備に入り、2016年2月から、2017年3月末の予定で、上記事業を開始した。

(文責・奥村弘)

## 大学協定に基づく大分県中津市との連携事業

大分県中津市は神戸大学の前身である神戸高等商業学校初代校長である水島鏡也の生誕の地であり、神戸大学のゆかりの地である。2014年5月に中津市で開催された水島校長生誕150年記念講演会をきっかけに、交流がはじまった。2015年7月には、中津市監修による『マンガ明治・大正期の教育者 水島鏡也』(粹書院)が出版され、本学文書史料室が資料提供を行うなど関係が築かれてきた。

これらの経緯を踏まえ、神戸大学の理念を語り継いでいくため、2016年度早い時期に大学協定が結ばれる準備が進んでいる。協定案の中には、「地域の歴史と文化に関すること」があり、その一環として、奥村弘副センター長が同市の「新歴史民俗資料館(仮称)」建設について、専門家の立場から教育委員会と意見交換を行った。

(文責・佐々木和子)